

私の学生時代

—「第二の草創期」の視点から—

花見 常幸

1 はじめに

懇切なご紹介を頂きました、法学部の花見です。今回は、11月18日という創価教育の歴史にとって大変に重要な記念の日に、こうした形で、学生の皆さんに話をさせていただく機会を得まして、とても有り難く思っています。神立所長をはじめとして、創価教育研究所の関係者の皆様に、心から感謝申し上げたいと思います。

先ほど神立所長からの紹介にもありました通り、私は、東京大田区の南蒲田という下町の出身でして、創価高校、創価大学の1期入学、卒業生の一人です。恐らく、そうしたことから、今回の「創価大学の草創を語る」というテーマでの連続講演会の依頼をいただいたのだと思います。

神立所長からは、内容に関して、「学生時代について、自由に思い出を語って下さい」ということでしたので、タイトルも「私の学生時代」としました。しかし、依頼を受けて時間が経つにつれ、ただ私の思い出話をしてもどうかと思いはじめました。皆さんの中にも読まれた人がいると思いますが、E・H・カーの『歴史とは何か』という書物があります。E・H・カーは、20世紀を代表する、大変有名な歴史家、哲学者ですね。『歴史とは何か』は、彼がケンブリッジ大学で講演した内容をまとめたもので、その翻訳書が岩波新書として出版されており、私の学生時代には学生の必読書でした。その中で、カーが述べているのは、「歴史とは、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話なのである」との有名な言葉です⁽¹⁾。この言葉の趣旨は、過去の出来事は、過去の出来事だから意味があるのではなく、私たちが生きている現在にとって意味をもつからこそ問題になるのであり、また、現在というものの意味も、過去との関係を通じて初めて明らかになるということだといわれています。この「歴史とは、現在と過去との対話である」との言葉を思い起こしまして、今日のお話もただの昔話や学生時代の思い出を振り返るだけではなく、創価大学の現在を理解することにつながるような話をすることにしました。果たして、そうした観点から見て、十分なお話ができるかどうか、あまり自信はありませんが、創始者池田大作先生ご自身が「いまが第二の草創期である」とおっしゃっている、現在の創大との関連を意識した上で、草創期の創大の様子や学生の様子を伝えることに主眼を置きまして、「私の学生時代」というテ

⁽¹⁾ E. H. カー（清水幾太郎訳）『歴史とは何か』（1962年）40頁。

Tsuneyuki Hanami（講演当時、創価大学法学部長。現在、通信教育部長・教授）

*本稿は、創価教育研究所記念講演会での講演（2009年11月18日）に加筆・訂正したものである。

マから若干はみ出すかも知れませんが、話をさせていただきたいと思います。

2 開学1年目の頃

1971年4月2日に創価大学は開学しますが、創立者は、開学に先立つ2年前に3つのモットーからなる建学の理念を示されていました。この3つについては、皆さんご存知の通りですけれども、第1に「人間教育の最高学府たれ」と言われたことに、私たちは注目すべきであると考えています。

当時のことを少し振り返ってみますと、ちょうど今年は、日本中の大学を巻き込んだ大学紛争から40年目の節目の年に当たりますが、40年前の1969年、「スチューデント・パワー」といわれた学生運動の嵐が日本中を吹き荒れていました。有名な東大安田講堂の攻防戦です。放水をする警官隊と、ヘルメットをかぶり、タオルで顔を覆った、そして当時「ゲバ棒」と呼ばれたタルキをもった学生との攻防戦があったのが1969年です。私は高校2年生でしたが、東大の入試が実施されなかったり、あるいは多くの大学が集まっている御茶ノ水駅の周辺は、その地域一帯が学生によって占拠されてしまい一般市民は怖くてそこに近づけない。私の母や妹は、テレビでその様子を見るだけで怖いといって、家の中から出れないようなそんな緊迫感のある雰囲気でした。まあ、今皆さんに説明しても実感が湧かないと思いますが、学生が大変に暴力的な部分を含んで、日本の社会を大きく動かした時期であり、その2年後に創大は誕生したのです。こうした時代状況は、創大創立の意義を考える上で大変に大きな意味を持っていると思います。

「スチューデント・パワー」といわれた世界的な大学紛争は、フランス・パリのカルチュランという学生街から始まります。その時の学生達の合言葉は、「教授よ、学問が古くなったのではないか」、「教授よ、信念がなくなったのではないか」というものでした。日本の大学も、全国のほぼ全ての大学が紛争に巻き込まれていくわけですが、当然大学ごとに学生が要求した問題は様々でした。例えば、大学の管理運営に学生の参加を求めるとか、様々な要求がなされていました。それが、さらには反体制的な運動、いわゆる中核派や核マル派などの学生運動にもつながっていきます。こうして各大学で問題状況の様々な違いはあったものの、そこで根本的に問われていたのは、「大学の講義は、専門研究の発表の場であって、学生が授業を理解できるかどうかは、ある意味でどうでもいい。それは学生の問題であって教員の問題ではない」という、まさに教育にほとんど関心を示さない教授や大学教育の在り方、「学生不在」の大学の在り方でした。皆さんがわが国の大学の歴史を学んでもらうと分かるのですが、戦前まで、大学に進学するのは、同世代の数パーセントであり、ごく限られたエリートのみ許されたことでした。その時期には、学生は皆学力が高く、自分で書物を読んで勉強しますから、どんな講義をしようと、全然つまらない講義でもよかったわけです。ところが、この60年代後半くらいになってくると、徐々にかなりの人が大学に行くようになる。当時、2割弱程度でしょうか、正確な数字は私の専門ではないので分かりませんが、こうした、大学がいわば大衆化に向かう中で、今申し上げた問題が起きてきた訳です。そこでは「大学の在り方」が根本的に問われていたのです。

現在、日本の大学教育の世界を見ると、いろんな大学がポスターや入学案内の中で、「人間教育」、

「学生第一」といっていますね。「学生のための大学」であるとか。こうして、今の大学教育の世界において、一般化している「人間教育」あるいは、「学生第一」という言葉があるわけですが、先ほど述べた学生運動の嵐がまさに吹き荒れている最中において、しかも当時の世論では、大学は専門教育の場であり、「大学で『人間教育』とは不見識、見当違いも甚だしい」との公然たる批判を受けかねない中で、1969年5月3日、創立者はある大事な会合で、「人間教育の最高学府たれ」との建学の理念を示されました。その先見性は、改めて強調されるべきではないかと思っています。

私たち1期生の場合、私のように高校からストレートに入学した者もいましたが、必ずしもそれはマジョリティーではありませんでした。池田先生が創立された大学で学びたいという強い思いで、全国から、大学を中退して創価大学にやってきた人がかなり沢山いたんですね。皆さんには信じられない状況かと思います。また、東大の受験が実施されなかったこともあり、長く浪人をしてきた人とか、他の大学を卒業して、創価大学に入学した人も含めて、創立者を求めて、まさしく全国から学生が集まったのです。したがって、いろいろな学生がいて、私なんか本当に可愛い者でした。大学内に、学生の猛者みたいな人が一杯いるわけですよ。「なんでこの人、ここにいるんだろう？」みたいな人がね。もう本当に大変です。要するに変わった学生が多かったとっていいと思います。

例を挙げた方が分かりやすいと思いますので、具体的な話をします。私は、滝山南寮4号室の寮生として大学生活をスタートしたのですが、いよいよ明日が入学式だという日になっても一人だけ入寮して来ない人がいました。私は、いい加減な人がいるんだなと思っていたところ、夜8時頃でしょうか、寮の部屋に戻ると、なんと、「布団袋」をミーティングルームのど真ん中に置いて、その上に胡坐をかいて座り、皆を集めて滔々と話をしている人がいました。当時は12人部屋でしたが、部屋の全員を集めてです。その人こそ、まだ入寮して来ない寮生として話題になっていた、^{あなみ}阿南久雄さんという人でした。彼は大分県別府出身の人で、名前が私と似ているので、寮の全館放送で、「^{あなみ}阿南さん電話です」というアナウンスを聞き、私が間違って行ってしまったことも何度かありました。その阿南さんが、滔々と話をしているわけです。何の話かという、阿南さんは、東洋大学で創価学会学生部の学内委員長だった人で、やっぱり猛者ですね。東洋大学を中途退学して創大に来た人ですが、別府から東京に上京したときの武勇伝を語っていました。当時は国鉄で、JRではないのですが、日本国有鉄道の初乗り運賃は10円でした。そこで10円の切符だけ買って列車に乗り、東京に来たという話です。変な話でしょ。要するに、自分にはお金が無い、でも東京の大学に行くに決めた。そこで、10円の切符だけ持って乗ったという訳です。当然、列車の中で、車掌さんが改札に来ます。でも、阿南さんは、それはもう想定していますから、ひたすら、狸寝入りを決め込み、どんなに起こされても起きるまいと決めていたそうです。しかし、それは敵も猿ものひっかくものでして、すぐ分かる訳ですね。この乗客おかしいと。で、まあ仕方なしに起こされて、切符拝見となった。「10円の区間はとっくに過ぎていますが、どこまで行きますか」、「東京です」、「何しに行くんですか」、「東京の大学で勉強するためです」。そして、阿南さんが財布を見せて、「お金はありません。でも、私は東京に勉強しに行きたいんです」と正直

にいったそうです。そうしたら、今では考えられないことだと思いますが、昔はいい時代だったんですね。その車掌さんもいい人だったようです。車掌さんは向学の心に変な感激をしてくれたようで、東京までの切符代を立て替えてくれた上に、さらに餞別としてお小遣いまでくれたそうです(笑)。阿南さんも、本当に嬉しかったとのことでした。こうした話を自信たっぷりに滔々と話していました。かなり常識外れだなという感じがして、驚きました。

いま、阿南さんのことを代表として紹介しましたが、こうした学生の猛者のような人が大勢いました。名前は言いませんけども、応援団長の格好をして授業に来る人とか(笑)、扇子を持っていますね。この人大丈夫かな(笑)って思いました。それから、早稲田大学の建築学科を卒業してから創価大学に入学し、猛然と外交官試験の勉強をして、見事に現役合格を果たした山口寿男さんという人もいます。山口さんは、4年で合格し大学を中退した関係で、創大卒の最初の外交官ではないのですが、創価大学で学んだ最初の大使として、南アフリカやノルウェーなどの大使を歴任し、大変に活躍している人です。まあ、この山口さんも本当に面白い人でした。いつも読んでいる新聞は、昨日か一昨日の新聞なんです。「山口さん、なんで今日の新聞を読まないんですか?」、「それはね、昨日の新聞だったらタダだから。勉強のために読んでいるんだ」と。とても合理的な答えです。もう一つ印象に残っている山口さんの言葉があります。それは、「私はね、人材という言葉は嫌いだ。人間を材木のように言うのはとんでもない」って(笑)。この人、ユニークな人だなと思いました。印象的な1期生の一人です。

草創の頃、私たちが入学した当初のことを思い出しますと、白亜の学び舎という形容がまさしくふさわしいA棟を中心とした施設群がありました。建物も何もかもが眩しいほどに新しい。そういう中で、教員の先生方にも学生にも、新しい大学を作っていくんだという草創の息吹きが溢れていました。反面、現在の創大と比べると実に寂しいものでした。建物、施設の面で言えば、この学生ホールをはじめとして、池田記念講堂や本部棟はもちろんありません。1年前期の間はA棟の半分がまだ建設中で、授業中にドリルの音が響いてきて、うるさくてしょうがないということもありました。施設としては、A棟の半分だけと、それからラーニング棟、体育館、第1グラウンドぐらいです。ラーニング棟の一部が図書室になっていました。要するに、A棟前のロータリーから東側はただの山林です。中央図書館も正門も何もない。もう、とにかく山です。バスも最初の頃は、直接大学に着く路線が通っていないのです。山の中のこんなに寂しいところで勉強しなければならぬんだという感じが実際のところありました。

したがって、牧口先生の書かれた「創価大学」の文字が刻まれている、あの立派な正門もなかったんです。当時の門は、裏門と呼ばれていた栄光門だけでした。そこから皆、大学に通っていました。ですから、当時私たち1期生は、全員が「裏口入学」であると、そういうふうになっていました。

文学の池は、あったんですけども、今のように立派に整備された文学の池ではありません。まあ、大きな水たまりという感じです(笑)。鯉はいました。おそらく大学の職員の人が、せっかく池田先生に「文学の池」という素晴らしい名前をつけていただいたので、鯉を放してくれたんだと思います。ところがやっぱり1期生は先ほどいったように、変わった人というか、ユニークな

人というか、不届き者が多いものですから、その鯉を捕って食べちゃうわけですよ（笑）。私は誘われなかったので、行かなかったんですけど（笑）。でも、あとから話を聞いたところ、泥臭くておいしくはなかったようです。そんなこともありました。

3 第1回創大祭のこと

冗談みたいな話ばかりしていてもしょうがないのですが、さっき寂しい感じがしたと言いました。何より寂しかったのは、入学式に創立者がお見えにならなかったことです。今回、解体されることになった中央体育館は、当時は本当に新しく綺麗な体育館でした。その広い体育館に約700名の1期の入学生だけが集まったわけです。現在の入学式のような、外国からの素晴らしい来賓の方は一人もいません。日本の来賓の方は、数名いたように記憶していますが、それくらいです。何より寂しかったことは、当然出席していただけると期待していた、創立者が見えなかったことです。大変寂しく思いました。その後も、創立者は大学にお見えになりません。当時、私たち学生には、どうして創立者が大学にお見えにならないのかよく分からない状態がずっと続きました。その理由は、『新・人間革命』の「創価大学」の章に書かれている通りですが、当時の教授陣の中には、創立者の仕事は大学が完成するまでであって、大学が正式にスタートしたら、教員が学生の教育に責任を負うのであり、創立者は大学に来るべきではない。そういう間違っただけの考え方が教授会の中に、はびこっていたということです。こうした事情も、当時の私たち学生にはよく分かりませんでした。とにもかくにも、創立者が大学に来られない事態が続いていたわけです。夏になっても来られない状態が続きます。当時殆どの男子学生は、滝山寮に住んでいましたので、私たち寮生は、「どうして創立者は大学に来られないのか」、「どうしたら創立者に来て頂けるのか」について、毎晩のように、夜を徹して考え、話し合っていました。そのときの皆の思いは、「もし、このまま創立者が来学されない事態が続けば、これから百年、千年と続く創価大学の歴史は間違っただけのものになる。私たちの後に陸続と続くであろう後輩たちに、誤った歴史を残すわけにはいかない」というものでした。

こうした真剣な討論の中から、学生主催の行事をやろうという、まさに妙案が生まれてきたわけです。学生が主催して行事を行い、それに創立者を御招待すれば大学も文句を言えないだろうというアイデアです。こうして、11月の創大祭が生まれました。また、創立者に年に1回しか来て頂けないのでは十分ではないということから、夏には滝山寮の寮祭をしようということで、2年目の7月の滝山祭が誕生したのです。

草創期の歴史の中で、ここのところが一番肝心な歴史だと私は思います。真剣に創立者を求める学生が、大学の建設のために、主体者となって立ち上がっていく。そして、行動するということです。

「第二の草創期」といわれている現在、創立者は「随筆 新・人間革命—第二の草創期」の中で、次のように草創期のことを語られています。当時の学生自治会の建物は、粗末なプレハブ造りでした。そこで大学建設について、真剣に議論している学生たちの声を窓越しに聞かれた創立者は、その議論の輪に飛び込んで行かれたそうです。そして、「誰もが、必死に理想的な母校の建

設を考えていた。嬉しかった。この学生たちがいる限り、わが創大は大丈夫だ！」と綴られています⁽²⁾。誰かがやってくれるだろうという傍観者のような、受け身の態度ではなく、大学の建設、発展のために、自分に何が出来るかを考え、そして行動する。このことが、「第二の草創期」であるいま、創大に学ぶ学生の皆さんにとって、とても重要な点ではないかなと思います。

先ほど申し上げたような経緯で、11月21日に第1回の歴史的な創大祭が開催されます。私たち1期生は、晴れて創立者を創価大学の行事にお迎えすることができたのです。当日に向けて幾晩も徹夜をしながら準備に当たって来た学友達の顔は、「やったぞ」という達成感に溢れていました。記念フェスティバルの中で、創立者は短いスピーチでしたけれども、私たち学生に最初のスピーチをしてくださいました。その内容は、『創立者の語らい』にある通りですが、そのスピーチの中で、次のように言われているところがあります。「私は皆さん方に対しては、オックスフォード大学をはじめ、伝統ある世界の有数大学のあり方と同じように、各々が偉大な人格をもつ人々として相対していきたいのです。いささかたりとも皆さんを“生徒”ていどの扱いにはしたくない。私よりも何十倍、何百倍も偉い無限の可能性を秘めた人格者であると、私は心の底で尊敬しております」⁽³⁾。この先生のスピーチを伺って、私は本当に感動しました。実際の表現としては、「皆さんをジェントルマン（紳士）であり、レディー（淑女）として」とも言われました。そういう優れた人格の存在として接していきたいとおっしゃっていただいたわけです。創立者が創大で学生に対して最初に行われたスピーチが、「創大生を心の底で尊敬している」という内容であったことをここで改めて確認しておきたいと思います。そして、その後も一貫して、今年の入学式でのスピーチもそうでしたが、創立者は、学生をどこまでも大切にされる、「学生第一」の精神を貫かれているわけです。

この時に、私たちの仲間は「世界学生友好協会」というクラブを作っており、クラブとして展示をしました。論文集も作りました。今後、創価大学が発展する中で、世界中から留学生がやって来て、学生の交流がはじまるだろう、また、私たち創大生も世界の大学に留学する時代が来るに違いない。「世界学生友好協会」というクラブは、その時のために基礎となる資料やデータをしっかり集めて準備をしようということで作ったクラブでした。ちゃんとハンコも作りました。いまそのハンコはどこに行ったかわかりませんが（笑）。この話を聞かれた皆さんは、「なぜ、今後の準備だけで、すぐ留学しようと思わなかったのですか」という、疑問をもたれるかもしれません。しかし、何と云っても、当時は1ドル360円の時代です。円の価値は今の3分の1以下しかありませんでした。余程裕福な家庭の子弟でなければ、なかなか留学は考えられない。当時は、現実的な話として、私たちの実感として、留学することは考えられませんでした。ただ、10月の初めには、大学のS教室や体育館などを会場として第3回の「世界学生平和会議」が開催され、日本の他の大学からの参加者を含めて、世界15か国から約千人の学生が創大のキャンパスに集い、公害問題やナショナリズムの問題について、活発な議論が展開されるとともに、学生同士の楽しい交流も行われました。こうした会議への参加などを通して、今後学生の交流が必ず盛んになる

(2) 創価大学創価教育研究所編『創立の精神を学ぶ』（2007年）303頁。

(3) 創価大学学生自治会編『創立者の語らい（上）』（1985年）48頁。

ことを実感していました。先ほどもいったように、クラブとして論文集も一生懸命に作りました。かなり売れると見込んだのですが、全然売れませんでした。でも、創立者に全部買っていただきました（笑）。他の模擬店とか、展示もみんな同じ状況でした。そうやって、激励をして頂いたわけです。

当時の1期生の皆の思いは、ともあれ何かの形で、創価大学の建設に関わっていきたいというものでした。例えば、「チュウケン」、中国文化研究会を作る、「ニチデンケン」、日本伝統文化研究会を作る。現在の箏曲部と茶道部の前身です。英研、ロシ研、あるいはラテ研ですね。語学系のクラブが多かったと思います。あるいは、学生自治会を立ち上げるために奮闘した友人もいました。私自身も先ほどのクラブとは別に、この建物の1階に入っている「創学サービス」の前身に当たる「創価大学生協同組合」の設立認可手続に、友人たちとともに学生側の設立発起人の一人として関わることができ、協同組合の監事も務めさせてもらいました。

4 「読書会」と5・30の懇談会

そういう中で、自分のことで恐縮ですけども、大学の教員になろうと考えるようになったきっかけは、これまであまり話していないことですが、経済学部の北政巳先生との出会いが大きいと思います。北先生は、大変にフランクというか気さくというか、人懐っこい先生なんですが、当時からそうでした、大学の教員の中で一番若い教員の一人でした。4月のまだ大学が始まったばかりの頃のことです。駅の方で買い物に行った帰りに、バスに乗っていたところ、よく知らない人が関西弁で親しげに話しかけて来ました。「この人、何なんだろう」と、一瞬怪訝に思ったのですが、その人が北先生でした。北先生は、大学の学生部で学生部委員として、滝山寮の担当だった関係で私の顔が分かり、話しかけてくれたようです。その数日後、北先生から、読書会を開くので是非参加しないかという話がありました。メンバーは、現在、大学の理事長である田代康則さん、一橋大学の法学部に合格して、そちらを蹴っ飛ばして創価大学に来た北川吉弘さん、卒業後に当時の文部省に入省し、全国の国立大学図書館の事務長を歴任している鈴木太郎さん、そして私という、ごく少人数の読書会でした。毎週木曜日の夜10時から、当時独身であった北先生の教員宿舎の部屋で2時間、読書会が行われました。経済学部と法学部の学生がいたことから、北先生は西洋経済史がご専門なのですが、教材はいわゆる社会科学の基礎理論を学ぶにふさわしいものを選んでもらいました。主に、岩波新書で、『社会科学の方法』とか、『社会認識の歩み』、『マックス・ウェーバー』、『人間マルクス』などです。当時の私は法学部の学生でありながら、大学の法律の授業にあまり興味を感じていませんでした。法学部長がこういう話をしてはいけないのかもしれませんが、正直なところ、そうでした。のちに大学院時代に読んだ本の中に、『科学としての法律学』という書物があります。この本は、「法社会学」という学問分野の基礎をつくったといわれている東京大学の川島武宜という先生が書かれたものですが、その中で川島先生は、次のように述べられています。「私が大学に入って法律学の講義を聴きはじめたころには、法律学に対してまったく興味をもつことができず、また法律学というのはいったいどういう学問であるかわからないで、日々の学生生活に少しも生き甲斐を感じることができなかつた。私は、はたして

自分が法律学の研究を大学3年間つづけてゆくべきであるか、またゆくことができるか、ということすらわからなくなってしまった⁽⁴⁾。こう川島先生は率直に語られていて、毎年、同じような悩みを東大法学部の新入生から聞かされると書かれています。川島先生が言われるには、それが法律学という学問の特質ということになります。つまり、18歳か19歳の大学1年生の時には、なかなか興味を持つことができないところに、「大人の学問」としての法律学の特徴があるということです。むしろ18、19という年齢では、「人間は何のために生きるのか」という問いを考える哲学であるとか、自然科学のように法則性を追及する学問に関心を持つのが自然である。それに対して法律学は、社会統制の技術としての法律を対象とする学問として複雑な価値判断を含んでいますし、そこでは法的な紛争をどう解決するかということが中心の課題であり、そもそも法的な紛争とはどんなものかを知らない学生にとって、およそ興味が沸かないのは当然であるという趣旨のことが書かれており、とても安心したことを覚えています。理由はともあれ、法律学の授業にあまり興味を感じることはできなかった1年生当時の私にとって、学問のワクワクするような面白さを感じる機会を作ってくれたのがこの読書会であったわけです。

夏休みが明けて9月に入った頃、同じく読書会に参加していた先ほどの北川吉弘さんと2人で、北先生の研究室に行きました。「経済学部へ転部したいと考えているのですが、どうでしょうか」という相談に行ったのです。その時、北先生から、まさに烈火のごとく、大変な勢いで叱られました。「何を考えているんだ。君たちが法学部を立派にしていかなければ、誰が立派にするんだ」と。本当に厳しく言われまして、這々の体で滝山寮に帰ったことを思い出します。一期生は皆、学生として在学中の問題として「大学建設」のために、何ができるかを考え、様々なところで努力をしていたわけですが、将来の大学、なかんずく学部の建設に関わることの重要性を、この出来事をきっかけとして真剣に考え始めることになったわけです。その意味で、北先生には、大変に感謝しています。

こうして大学に残って「大学建設」に関わることを考え始めていたのですが、そのことをはっきりと決意する出来事が、翌年の1972年5月30日にありました。創立者は皆さんご存知の通り、72年5月、イギリスでトインビー博士との有名な対談を行われるのですが、帰国後すぐに、5月30日、日本武道館で開催された本部幹部会に出席されます。その本部幹部会の直後に、武道館の一室で、創大生の代表約30名と懇談する機会を設けていただきました。その席で創立者は、トインビー博士との対談の合間を縫って、オックスフォード大学とケンブリッジ大学を訪問された様子を詳しく話して下さいました。とくに、図書館の様子について、実際にニュートンやベーコンが使っていた机や椅子が当時のままに残されており、そこには、学問の厳しさを強く感じさせるものがあつたこと、また当時、日本の大学の教授は皆威張っていたのですが、オックスフォード、ケンブリッジ両大学の教授の方何人かとお話をしたけれども、決して威張った雰囲気はなく、学生を本当に大切にしている様子が印象的であつたことなどについて、教えていただきました。先生は学生寮にも突然行かれたそうです。学生寮は2人1部屋で、先生が、「一番困ることは何な

⁽⁴⁾ 川島武宜『科学としての法律学』(1964年)3頁。

の？」と聞かれると、「自分が勉強しようと思うと、相手の人がギターを弾き始める。そして、相手が勉強を始めると、今度は自分がラジオを聞きたくなることです」との答えであったことを紹介されて、「みんなと同じだね」と言われながら、寮生活が人との対応を学ぶ大事な訓練の場となることを語られました。その上で、創立者は、懇談会に参加していた私たちに対して、「君達学生の力で、創価大学をオックスフォード大学やケンブリッジ大学のような、世界一流の大学にしてほしいんだ。頼むよ。」という趣旨のお話をして下さいました。創立者の創価大学建設に対する本当に壮大な思いに、私たち学生が初めて触れた瞬間でした。まさしく、鳥肌が立つ思いでした。先生は、オックスフォード、ケンブリッジと肩を並べるような大学を創っていくんだと、言われたわけです。しかも、その懇談会に出席していたのは、教職員では当時の篠原学生部長ぐらいであり、あとは全員学生でした。先生は、私たち学生を信頼されて、大変に大きな期待を下さったのだと思います。この懇談会が私の学生時代の大事な原点です。実はそこには、石井短大学長、山崎文学部長、前田経営学部長、この後登場する小林芳夫さんといった1期生の友人たちが参加しており、皆それぞれの分野で、創立者の構想の実現を目指して努力していくことになります。そういう大事な会合でした。

5 第1回滝山祭

第1回の滝山祭が7月6日に行われます。その日は雨でした。雨でしたけども、何より嬉しいことに創立者に来ていただいて、元気一杯に開催されました。滝山祭に向けて、先ほどの5月30日の懇談会に参加したメンバー数人で集まり、話し合いをしました。その中で、創立者が訪問されたオックスフォード大学とケンブリッジ大学について、まずはしっかりと勉強すべきだということになり、両大学の歴史を勉強しました。そして本当にささやかな研究であったわけですが、その成果を滝山祭の当日に、滝山寮の中寮広間という結構広い部屋を使って、模造紙に書いて展示をするという計画を立てました。創立者が滝山祭にお見えになったときには、ぜひ見ていただきたいとの思いを込めて、なるべく綺麗な字で書きました。また、創立者用の四角い大学帽を紙で作し、用意しました。そして当日、大変うれしいことに先生は中寮広間に来て下さったのです。「私達がつくった大学帽です。ぜひ被って下さい」とお願いをしたところ、早速被っていただいたわけです。そのときの様子は、『新・人間革命』の中に次のように書いていただいています。「そこには、創立者を慕い、誇りとする、寮生たちの気持ちが込められていた。それを感じ取った伸一は、丁重に答えた。『ありがとう。創価大学に集ってくださった、私の宝である学生諸君からの、私への顕彰として被らせてもらいます』。寮生の真心を、彼は冠したのである」⁽⁵⁾と。紙の帽子でしたけども、創立者は本当に嬉しそうに被られていたことをよく覚えています。

その後、中央体育館で「寮歌祭」が開催されます。のちに第3代全寮代表になる、創価教育研究所の塩原将行さんもその会場に一緒にいたわけですが、創立者の前で、滝山寮の各寮の寮歌を発表させていただきました。実はこの時、南寮、中寮、東寮、北寮の4つの寮があったので

⁽⁵⁾ 池田大作『新・人間革命（第15巻）』（2006年）189頁。

すが、滝山寮全体の運動として、まず各寮の寮歌を作ろう、その上で一番良いものを選んで、正式な滝山寮の寮歌にしよう、ぜひそれを先生に決めていただくんだという計画で、寮歌作成運動を進めていました。私は、昔から音楽は決して得意ではなかったのですが、なぜか私とその責任者でした。私たち寮生としては、南寮の寮歌が一番だと考えて、それを先生の前で歌い、聞いていただきました。その時に創立者はこう言われました。「歌というのは、みんなが自然に歌いたいと思うようなものがないんだよ」と、以上おしまいです(笑)。その後、創立者は、歌を作る時に基本となることについて、論ずように話をして下さいました。

失敗だということですよ。皆さんご存知の通り、創価学園には学園1期生の小倉裕児さんが作詞した、素晴らしい学園寮歌があります。現在の校歌ですね。あの寮歌を超えることはやはり難しかったということだと思います。ただ、その後の歴史を振り返って思うことは、この失敗を生かし、大学は寮歌ではなくて学生歌をつくらうということで、その後、中村宏勝さんが作詞をし、川上慎一さんが作曲する学生歌が誕生するのですが、この寮歌作りの試みは、少なくともその遠因にはなったということです。

6 草創の学友達

次に、草創の学友達ということで、少し1期生、2期生の友人の話をさせていただきたいと思います。小林芳夫さんという法学部1期の友人がいます。現役3年生で司法試験に合格をした人です。司法試験は、現在は新しい制度となり、新司法試験といいますが、当時もいまま、日本で一番難しい試験だといわれています。合格率は3%程度、合格者の平均年齢はおよそ28歳、そういう試験です。その試験に現役3年生で合格する者はほとんどいません。多い年でも全国で数人の世界であり、まさに快挙です。当時、体育の授業は必須科目で体操着というものがありました。赤と白のツートンカラーの体操着で、遠くから見るとウルトラマンのように見えます。その体操着を小林さんはいつも着ていました。いつ洗濯するだろうと思いましたが、そんなことは考えちゃいけない(笑)。服なんて関係ないという世界です。彼の滝山寮の部屋にも何度か行きましたけれども、寮のスタディールームではうるさくて勉強にならないと、彼はベッドルームの自分のベッドの上に板を渡して、ランプをつけ、集中できるように昼間も部屋を暗くして勉強していました。こうした鬼神も泣くような猛然たる勉学の結果、見事、現役3年生で合格します。合格後に本人から話を聞きましたが、「ともかく、日本で一番難しいといわれる司法試験に挑戦し、合格を勝ち取ることによって、創大の存在を社会に示していきたいと思った。また、創立者の正義を世に少しでも訴えていきたいと思ったんだ」と、そう語っていました。こうした強い思いが3年合格という快挙に結び付いたのだと思います。

実は、彼とは3、4年の専門ゼミが刑法のゼミで一緒でした。久禮田益喜先生という、最高裁判所の前身である大審院、いわば明治憲法時代の最高裁判所ですが、その裁判官であった大先生のゼミでした。ただ如何せん高齢の先生でしたので、残念ながら、私たちが3年の11月頃だったと記憶していますが、ご病気で入院されます。大学に来られなくなった。それで、ゼミはどうなったかといいますと、学生だけでやっていました。小林さんや卒業1年目で司法試験に合格する

稲毛一郎さんなど司法試験組が4、5名いましたので、十分ゼミになるんですね。ガンガン議論していました。しかし、久禮田先生は心配をされまして、当時明治大学の講師か助教授をされていた、お弟子さんの若い先生にゼミの面倒をみてもらえるよう、手配をさせていただきました。その若い先生は何度かゼミに見えましたが、我々が意地悪だったのか、意地悪ではなかったと思いますが、その先生にどんどん質問をするわけです。しかし、十分に答えられないことが多く、結果として、来られなくなりました（笑）。「君達だけでゼミができるようだから、もう行かなくていいよね」と、いわれて来なくなりました。この先生の話は別として、今でも私は大学のゼミ（演習）の基本的なあり方がそこにあったのではないかと、考えています。つまり、あくまでも、学生が主体者となって、徹底して勉強し、議論をする、これがゼミの一番の基本だということです。もちろん学生だけでは、議論が混乱したり、行き詰まったりするものですから、教員の先生が交通整理をする必要がありますし、また学生としては、先生から最新の学説の紹介を含めて、自分たちが知っているものとは違う世界、深い学問の世界の一端でも示してもらえれば、本当に楽しいわけです。そういう意味で、ゼミにおいても教員の役割が重要であることは、いうまでもないのですが、教員がいらなくなる位に、学生の皆さんが主体者として徹底して勉強することがゼミの基本のあり方だということを強調しておきたいと思います。

2期生以降の後輩の皆さんにも優秀な人が大勢いますが、私にとって大変印象的であるのは、2期生の桐谷篤輝さんと福田有亮さんの2人です。現在、2人とも大手ゼネコンの大林組と大成建設で役員として活躍していますが、この2人と、同じく2期生で弁護士としてがんばっている松村光晃さんが一緒になって、「創友会奨学金」の源流を作ってくれたのです。現在、創大の卒業生の同窓会である「創友会」による奨学金制度が充実した形で出来上がっているのですが、とりわけ桐谷さんと福田さんの2人がその源流を作った中心人物です。2人は法学部の学生として、司法試験合格を目指していました。しかし、経済的な理由で、卒業後は勉強を続けられず、法曹の道を断念して、一般企業に就職をしました。ただ、後に続く後輩たちが自分と同じように経済的理由で勉強が続けられないのは大変に残念だから、安月給ですけれどもその中からお金を寄付させていただいて、後輩たちのための奨学金をつくりたいと考えた。そのことを、たまたま創立者にお会いする機会があって、直接創立者に申し上げたそうです。それを聞かれて創立者は大変に喜ばれて、「後輩のためという、その心が大事なんだ。そういう形で奨学金をつくれたらいいね。」といわれたそうです。

桐谷さんについては、就職活動のときのエピソードも有名です。1期、2期のときの就職活動は、現在とは様子が全然違います。書類を見ただけの段階で、「御宅の大学とは御縁がありませんから」といわれて帰されてしまうことが普通でした。桐谷さんも、本人から話を聞きましたが、ビールやウイスキーのメーカーを中心に回ったが、全部そうだった。そもそも会ってくれない。書類を出すだけでおしまい。理由は創価大学だからだと思う。はっきりいって、ふてくされた半分諦めたような気持ちになっていたそうです。いままA棟1階に自動販売機などが置かれている広いテラスがありますが、当時はそこに長いベンチがあり、彼は就職活動の疲れもあって、昼間の時間でしたが、そのベンチでふて寝をしていたそうです。もうやけになって寝ていたところ、

起こす人がいる。せっかくだいいい気持ちで寝ているのに誰が起こすのだろうと思って、パッと目を開いたら、創立者だったそうです。「どうしたの?」と心配されて、話を全部聞いてくださった。そのとき、創立者は、「たとえ、ゴミ箱の中に入っているダイヤモンドはダイヤモンドだよ。必ず見つけてくれる人がいるんだよ」といわれそうです。周りや環境のせいにするのではなく、自分自身がダイヤモンドのような輝く存在になっていくことが大事だという激励をいただいて、その後、彼は見事に大林組から内定をもらうことになります。

7 「英知を磨くは何のため 君よ それを忘るるな」

法学部長として、少し法学部のPRをさせていただきますと、1期生に続いて2期、3期と続く後輩たちによって、司法試験に強い創大法学部の伝統がつくられてきました。そして、開学39年目となる今年も、新司法試験に創大から14名が合格し、開学以来の司法試験合格者の累計は186名となりました。これは、戦後に創設された高等教育機関の中で全国第1位の実績であり、法学部の1期入学、卒業生の一人として本当にうれしく、また誇りに思っています。

他の大学の法学部の先生方と懇談をしていますと、以前からよく「なぜ、創価大学さんは司法試験に強いんですか、その秘訣は何ですか」と聞かれます。当然、他大の先生方は創価大学の偏差値がそんなに高くないことをよく知っているわけです。偏差値は普通であるにも関わらず、司法試験で大きな成果を上げているので、質問されるのだと思います。そんな時に私が最初にお話をするのは、「学生が優秀だからです。創価大学には、偏差値では計れない優秀な学生がたくさんいるからです。」ということです。しかし、そのように答えたところで、相手の人は納得しない(笑)。そうかもしれないけれど、秘訣があるでしょって話になるわけです。そこで、「本学には自分が合格しただけでは本当の合格ではない、後輩を合格させて初めて本当の合格だという伝統があります。合格者が後輩たちのために時間のないなか、大学にやって来て文字通り、手とり足とり指導してくれる。それが秘訣といえば秘訣であり、成果に結びついているのだと思います」という話をしますと、「羨ましいですね」といわれることが多いわけです。私はこの「後輩のために」という創大の伝統は、決して司法試験などの国家試験に限ったことではないと思うんですね。寮生活をはじめ、就職活動、或いはゼミの活動など、本学のあらゆるところに漲っている精神的な伝統だと思います。この「後輩のために」という気持ちは、当然「創立者の正義を証明する」という決意と深い次元で繋がっていることはいまでもありません。創立者は、皆さんもよく知っていると思いますが、開学の時に一対のブロンズ像を大学に贈っていただきました。そのブロンズ像の一つの台座には「英知を磨くは何のため 君よ それを忘るるな」という指針が示されています。創立者が開学の時に私たち学生に示されたこの指針、メッセージが39年の時を経て、「後輩のために、人のために、そして世界のために学ぶのだ」との精神的伝統として、学内にしっかりと根付いているのだと思います。

私の憲法ゼミの出身で飽浦昌城君という元気で優秀な33期の卒業生がいます。法学部卒業後、大学院法学研究科で学び、上級職試験に合格して、この4月から東京都庁で勤務しているのですが、彼は関西地方の有名な中高一貫の進学校から創大に来ました。よくあるケースですけども、

本人の意志というよりはお母さんがぜひ創大に行って欲しいということで、創大にやって来た人です。親孝行だなと思います。ところが話を聞きますと、彼の出身校は、有名な中高一貫の進学校ですが、男子校で全寮制であり、学校の寮ではいじめが横行していたそうです。上級生に自分の物が盗まれる、そして殴られるのは当たり前。先生にいても何も変わらないという酷い状況の中で、じっと我慢していたそうです。上級生になればいじめる側になれるから、それまでは我慢するしかないという、本当に酷い状況であった。そして、創価大学に合格し滝山寮に入ります。鮑浦君としては、滝山寮も男子寮ですから、当然やられるだろう、いじめられるだろうと思った。覚悟を決めていたそうです。ところが滝山寮の先輩たちは妙に優しい。これは何か裏があるに違いない、いつか必ずその正体を現すに違いないと考えて、ずっと警戒心を解かなかったそうです。4月、5月、6月と時間が経っても、先輩たちの態度は少しも変わらない。そして、ついに分かるんですね。これは本物だと。寮の先輩たちの優しさが本物の優しさだということに気づいたときに創価大学が大好きになったという話をしていました。

8 創立者の目指される、創大での「人間教育」

もう一つ、私が学生時代からずっと考えてきた問題があります。それは、創立者が何のために創大をつくられたのかという問題です。

この問題は、創価大学で学んでいる学生の皆さん一人一人に、是非とも考えてもらいたい問題だと考えており、時間があれば、今日集まっている皆さんにもぜひ意見を聞いてみたいと思います。時間の関係で、それができないのが残念ですが、なぜ創立者は創価大学をつくられたのか。もちろん、いろいろな答えが可能な問題であり、ただ一つの正解があるというような問題ではありませんが、これまでずっと考えてきた中で、一番のキー（鍵）になるのは、指導者を育てることだだと思います。それも単なる指導者ではなく、新しい人間主義の時代を開いていく、そういう指導者を育成されようとしている。しかも、一つの宗教団体のためといった視野の狭いものではなくて、まさしく地球的な問題群の解決に貢献することを含め、広く人類のために活躍できるような指導者、リーダーを育てるために創価大学をつくられたのではないかと考えています。是非、皆さんそれぞれの立場で考えてみて下さい。

もう一つ、皆さんに考えてもらいたいのは、なぜ、創立者は親孝行のことを繰り返し強調されるのかという問題です。今年の入学式でも、また先日のインドネシア大学からの名誉教授称号授与式のスピーチでも、親孝行のことを強調されていました。最近の卒業式、入学式の時には、毎回必ずと言っていいほど、「親孝行している人？」と、聞かれますし、本当に何度も親孝行の大切さについて話をされています。どうして、創立者はこれほどまでに親孝行のことを強調されるのかということも、是非考えていく必要があると思うんです。私の意見では、創立者は先ほど述べたように、創大生は将来全員が指導者になって欲しいと願われていると思います。指導者といっても、いろいろな形があるわけで、地域や職場の中で信頼を勝ち得るリーダーとなる人もいますし、またまさに世界に飛び出して活躍する人もいます。いずれの場合にも、指導者として活躍していく上で何より大事なことは、人間そのものに対する深い人間愛である。それがなければ

創価大学で学んだリーダーとはいえない、そういう人間に対する深い人間愛を持つことが不可欠だと創立者はお考えになっているのではないかと思うのです。「深い人間愛」を持つといっても実際のところは難しいですよ。ですから、まずは、お母さんお父さんがどんな思いで、自分を育ててくれたのか、どんな苦勞をして育ててくれたのかを知り、ご両親に対する感謝の思いを持ち、親孝行をするということから、「深い人間愛」を持つことは始まるんだというように考えられているのだと思います。だからこそ、親孝行の大切さを何度も繰り返し強調されているのだと思います。

9 まとめ

以上が今日お話ししようと考えていたことですが、これまでの話を簡単にまとめるとすれば、草創期以来の創価大学の学生の伝統は次の3つに集約されることになると思います。

第1に、「学生が創立者とともに大学の建設のために立ち上がっていく、すなわち、若き創立者として行動する伝統」であり、第2に、「創立者の正義を証明していくために自分の限界に挑戦していく伝統」、そして第3に、先ほど強調しました「後輩のため、人のため、そして世界のために学ぶという精神的伝統」の3つです。そして、この3つの伝統は、いずれも、創立者と学生との深き心の絆のあらわれであるといつてよいと思います。

最後に、第1回卒業式の席上、創立者が私たち1期生に送られた言葉を紹介して終わりたいと思います。1974年3月22日、第1回卒業式の当日は、私たち1期生の前途を祝福するかのよう、素晴らしい日本晴れでした。現在のように、世界からの来賓は見えませんでした。創立者に出席していただいたことが、何よりうれしかったことを思い出します。とくに印象に残っているのは、スピーチの最後に創立者が「靈山一会嚴然未散」という法華經の言葉を引用されたことです。これは釈尊が法華經を説いた靈山会の儀式は、それが終わった後も、嚴然と散ることなく永遠に続くという意味の言葉です。この言葉を通して、今日の卒業式の式典自体は終わったとしても、創立者と卒業生との師弟の絆、そして1期卒業生同士の友情の絆は、未来に渡って永遠に続くのであるという趣旨の話をして下さいました。当時、このスピーチを伺って大変感動したことを思い起こしますが、この創立者の1期生に対する思い、あるいは期待の心は、「第二の草創期」の現在、創大のキャンパスで学ぶ学生の皆さんに対する思いや期待の心と全く同じだと思います。

皆さんに対する、創立者の大変に深い思いと期待を真正面から受け止め、大いに勉学に挑戦して、新しい人間主義の時代を開いていく指導者に是非とも成長していつてもらいたいことを心からお願いして、私の話にしたいと思います。ご清聴、本当にありがとうございました。